ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

－第四章－

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

－第四章－

1000450672-B

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

― 第四章 ―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第四章　永遠の終焉　— Puppeteer In The Mists —

1

明け方までの雨が嘘のように、空はよく晴れていた。海岸沿いを走るモノレールの車体を、真昼の太陽が眩く照らしている。

「あー……眠……」

アルミニウム製の車両のドアにもたれて、気怠く呟いているのは暁古城だ。

市内を循環するモノレールは、絃神島を構成する四基のギガフロートのひとつ——人工島西地区へと入るところだった。小洒落たレストランやブランドショップが建ち並ぶ、絃神島最大の商業地区である。そこへ向かうモノレールの乗客たちも、心なしか、華やかなファッションに身を包んだ若者が多い。

「くそ、この島は朝から無駄に天気良すぎるだろ……俺を焼き殺す気か……」

しかし古城は、代わり映えのしない普段着のパーカーのフードを目深に被り、車窓から射しこむ陽光を恨みがましく睨んでいる。

「もう、古城君しっかりしてよ。吸血鬼じゃあるまいし」

そんな古城を呆れ顔で眺めて、制服姿の凪沙が首を振った。冗談めかした彼女の言葉に、古城はギクリと顔を強張らせる。

古城が成り行きで〝世界最強の吸血鬼〟の力を手に入れてしまったことは、実の妹である凪沙にだけは知られてはならない秘密なのだった。魔族恐怖症である凪沙がそれを知ったら、おそらく彼女はひどく苦しむことになるからだ。

「ウチにいてもどうせ暇だろうと思って、わざわざ連れてきてあげたんだよ。退屈な日曜日に、こんな可愛い女の子たちとお出かけできるんだから、もっと感謝してよね」

「可愛い女の子たち……って、おまえも数に入ってんのか。まあいいけど」

恩着せがましく胸を張る妹を見返して、古城はやれやれと嘆息する。

「すみません、先輩。わたしの買い物につき合わせてしまって」

二人のやりとりを聞いていた姫柊雪菜が、遠慮がちな口調でそう言った。

休日なのに制服を着ているのは、雪菜も同じだ。彼女が背中に担いでいるのは、愛用の黒いギターケース。ただしその中に入っているのは、ギターではなく吸血鬼の真祖をも殺し得る破魔の槍——七式突撃降魔機槍と呼ばれる獅子王機関の秘奥兵器である。彼女はこう見えても日本政府から派遣されてきた、古城の監視役なのだ。

「ああいや、それはべつにいいんだ。道案内が凪沙だけだと俺も心配だしな。さすがに菓子につられて知らない大人についていったりはしないだろうけど」

古城が投げやりな口調で言う。雪菜は絃神島の地理にまだ不慣れだし、おまけに一般常識にも少々疎い。凪沙一人に雪菜の案内を任せるのは、古城としても不安だったのだ。

「またそうやって凪沙をすぐに子ども扱いして！　どうせ心配するなら、ナンパされるんじゃないか、とか、芸能界にスカウトされるんじゃないか、とか、そっちでしょ！」

その凪沙が、不満げに眉を吊り上げて反論してくる。はいはいそうだな、と古城は妹の抗議を適当に受け流し、

「そういや今日はなにを買う予定だったんだ？」

「私服です。高神の杜は全寮制だったので、わたしは外出着をほとんど持ってなくて」

「ああ……それで今日も制服なのか」

古城が納得したように呟いた。雪菜が絃神島に来てから半月ほどが過ぎていたが、言われてみれば、古城には彼女の私服を見た記憶がない。

「楽しみだよね。雪菜ちゃんなら、いくらでもお洒落な服が似合うと思うし」

なぜかやる気に満ちた表情で凪沙が言う。どうやら彼女はここぞとばかりに、雪菜の服をコーディネイトする気満々らしい。実際、凪沙がそう言いたくなる気持ちはよくわかる。アイドル級の端整な容姿を持つ雪菜は、実に着飾らせ甲斐のある素材なのだ。

しかし肝心の雪菜本人は、あまり服選びに自信がないらしく、

「いちおう最近の流行を調べてきたんですけど」

そう言ってギターケースのポケットから真新しい雑誌を取り出した。雑誌のあちこちに貼りつけた付箋が、雪菜の研究の跡を示している。

古城は感心したように軽く眉を上げ、

「へえ。ちょっと見せてもらってもいいか？」

「はい。このあたりのはどうかなって」

そう言って雪菜が指さしたのは、白地にピンクの縁取りが入ったトレーニングウェアだった。おお、と感嘆の声を洩らす古城。

「ルディダスのニューモデルか。いいよな、それ。軽くて動きやすそうだし」

「はい。UVカット機能のある生地ですし、強度と速乾性にも優れているそうです」

古城の同意を得られたことで、雪菜は嬉しそうに説明を続ける。

「こっちのスポーツタイツもけっこう良かったぜ。俺が使ってたのは一個前のモデルだけど、膝や腰の負担がだいぶ減って楽だった」

「そうですか。では、それも試してみます。わたしも少し気になっていたので」

「ちょ……ちょっと待って。ルディダスのニューモデルって、

それ……ジャージだよね？」

盛り上がる雪菜と古城の会話に割りこんで、凪沙が不安そうに訊いてくる。雪菜は、きょとんと小首を傾げて、

「……え？」

「え、じゃなくて。外出着を買いに来たんじゃなかったの？　なんでスポーツウェア一択？　お洒落な服は？」

「だから、お出かけ用のジャージじゃないのか？　洒落てるだろ、これ？」

古城が不思議そうな表情で確認した。元バスケ部員の古城にとって、外出着といえば当然ジャージである。そのあたりの感覚は、雪菜も同じだったらしいのだが――

「いやいやいやいや、洒落てるっていってもしょせんジャージだから！　運動服だからね？　世の中には、もっと普通にお洒落な私服があるから！　二人とも思考が体育会系すぎるよ……こんなことなら古城君なんかじゃなくて、浅葱ちゃんに来てもらえばよかった……」

凪沙が頭を抱えて大げさに嘆く。自分のファッションセンスを全否定された古城は、苦々しげに唇を歪めて、

「……浅葱の服も、あれが普通ってことはないだろ」

「とにかくあたしが一緒に来たからには、雪菜ちゃんには可愛い私服を着てもらうから。古城君だって、お洒落した雪菜ちゃんを見てみたいと思うでしょ」

「いや、俺は、姫柊の服なんかはべつに――」

有無を言わせぬ凪沙の気迫に、古城はうっかり本音を洩らしてしまい、その瞬間、ピキ、と雪菜の口元が引き攣った。

「わたしの服なんか……ですか……べつに……ですか。そうですか」

わたしのことを可愛いって言ったくせに、と口の中で呟きながら、雪菜が冷え冷えとした気配を放ち始める。古城は底冷えのする悪寒を覚えながら慌てて首を振り、

「あー……そ、そうだな。せっかくだからジャージや制服以外の服も見てみたい……かな」

「そうだよねえ。うんうん」

凪沙はそう言って無邪気に目を細めた。

その直後、古城たちの乗ったモノレールが減速を始める。次の停車駅に着いたのだ。車窓に映るのはショッピングモールの巨大な建物。屋上からぶら下がった垂れ幕には、『売り尽くしセール』の文字が躍っていた。買い物客で混み合う駅のホームを眺めて、凪沙のテンションが上がっていくのがわかる。雪菜が緊張の面持ちで唇を噛む。

「行くよ、雪菜ちゃん！　古城君も！」

モノレールのドアが開き、凪沙は真っ先にホームへと飛び出した。

彼女の背中を追いかけながら、古城は深々と溜息をつく。どうやら今日の買い物は、なかなかハードなことになりそうだった。

2

狭く息苦しいトンネルの中に、無数の銃声が反響していた。

絃神島の地下に埋めこまれた巨大な排水溝である。分厚いコンクリートで四方を覆われた密閉空間に、防弾防護服を着た武装警備員の部隊が展開している。彼らが装備しているのは、対魔族用の特殊兵器。特区警備隊の強襲部隊だ。

彼らと交戦していたのは、純白の髪を持つ奇怪な人形だった。

機械人形の精緻さと、人工生命体の艶めかしさを併せ持つ、美しい生体人形だ。しかし彼女の右半身は焼けただれ、彼女の腰から下は蜘蛛に似た八本脚の怪物のものである。絃神島で無差別の殺戮を繰り返していた殺人人形――〝人形師〟の異名を持つ魔導犯罪者が造りだした怪物だ。

その怪物の隠れ家を特定した特区警備隊が、奇襲攻撃を仕掛けたのは、ほんの数分前のこと。殺人人形はたったの一体。それに対して強襲部隊は、四十名を超える武装警備員を投入している。

しかし一方的に敵を蹂躙していたのは、異形の殺人人形のほうだった。

地下通路に張り巡らされた鋼の糸が警備員たちの全身を搦め捕り、動けなくなった彼らを、殺人人形の刃が斬り裂いていく。殺人人形は特区警備隊の襲撃に備えて、排水溝内に無数の罠を仕掛けていたのだ。捕らえた獲物を引き裂く蜘蛛のように、彼女は警備員を次々に無力化していく。

「目標はどこだ……!?　応答しろ！　誰か……！　応答してくれ！」

追い詰められた警備員の一人が、音声の途絶えた無線機に向かって怒鳴っていた。

そんな彼の足首に、不意に糸が絡みつく。肉眼では見えないほどに細い傀儡使いの糸だ。しかしその材質は強靭で、ナイフを使っても容易に切断することはできない。

その糸に意識を向けた直後、異形の人形が彼の眼前に現れた。

警備員が反応する前に、人形の攻撃が彼を襲った。尖った槍に似た金属製の脚が、防弾防護服を易々と貫通し、彼の身体を背後の壁に縫いつける。

警備員はサブマシンガンを乱射した。しかし撃ち放たれた銃弾は、ブヨブヨとした不定型の胴体に阻まれて、人形の本体には届かない。

「クソッ、化け物め……！」

血塗れの口で悪態をつきながら、警備員が手榴弾のピンを抜いた。通路に転がった手榴弾が爆発する。爆風に煽られた人形が吹き飛んだ。ようやく人形の脚から解放されて、警備員がずるずると倒れこむ。

「――否定。私は化け物ではありません」

ギシギシと身体を軋ませながら、殺人人形が再び立ち上がった。間近で手榴弾の爆発を浴びながらも、彼女の機能に支障はないらしい。全身にまとわりつく炎を振り払いながら、無感動な声で彼女は告げる。

「私はザカリー・アンドレイド様製作の生体人形――個体名〝スワニルダ〟です。存在意義は、〝永遠〟に美しいまま生き続けること。たとえ所有者である人間が滅びても――」

金属製の脚を荒々しく踏み鳴らし、スワニルダが動き出す。このまま地上へと向かうつもりなのだ。それに気づいた警備員が、倒れたままスワニルダの背中へと銃を向ける。

「待て……止まれ……」

「命令拒否」

警備員の必死の警告に、スワニルダは振り返ることもなく冷淡に答えた。

その瞬間、警備員の視界がぐらりと揺れた。

スワニルダの脚に貫かれたとき、すでに彼の肉体からは精気が奪い尽くされていた。殺人人形を止めるだけの体力は、彼には残されていなかったのだ。

他人と融合して、その生命力を奪う。それがスワニルダに与えられた新たな能力だ。一度は〝人形師〟に見捨てられ、新型人工生命体〝ナタナエル〟に喰われたことで、彼女はその力を手に入れたのだ。今のスワニルダは他者の生命力を吸蔵することで、自らの魔力の増幅すら可能になっていた。

しかしそれだけではまだ足りない。スワニルダはそのことを自覚していた。彼女の目的を果たすためには、さらに強い力が必要だ。

「生体組織損耗率二十八パーセント。武装稼働率三十九パーセント。残弾数二百五十八――現在の戦闘能力で試験体〝アスタルテ〟の捕獲は達成困難と推測。能力の強化が必要です」

暗い排水溝の中を這いずりながら、スワニルダはそう繰り返す。

第四真祖の無尽蔵の魔力を使う権利を与えられた、唯一無二の人工生命体アスタルテ――彼女を喰らって〝永遠〟の生命を手に入れる。それがスワニルダの目的だ。主人であるアンドレイドすら殺したスワニルダに、それ以外の存在意義はない。

そして暗闇の中を彷徨っていた彼女は、ふと気づく。

彼女の記憶と一致する魔力源が、すぐ近くにいることに。

それは彼女が知る中でも、もっとも強大な魔力の持ち主だった。スワニルダが求める〝永遠〟に、限りなく近い存在だ。もしその一部でも奪うことが出来たなら、彼女は今度こそアスタルテを圧倒する力を手に入れることができるだろう。否、もはやアスタルテを捕獲する必要すらない。彼と融合することで、彼女は〝永遠〟そのものになれるのだ。

奇しくも彼がいる場所は、スワニルダが、人を襲うための狩り場として使っている建物の近くだった。彼は自ら、スワニルダの縄張りへと入って来たのだ。この好機を逃す理由はない。

「戦術オプションC9を選択。執行せよ、執行せよ、執行せよ、執行せよ――」

スワニルダの背中が大きく割れて、そこから現れた無数の副腕が、翼のように広がった。

彼女の周囲を、凍てつくような冷気の霧が包み始める。

それは糸に代わる彼女の魔力の媒体。眠れる傀儡たちを呼び覚ます、邪悪な純白の闇だった。

3

「ここがリディアン絃神……ですか」

ショッピングモールの入り口に立って、雪菜は呆然と店内を眺めている。

リディアン絃神は、人工島西地区の郊外に建つ大型商業施設だった。総店舗数は三百三十六。ガラス張りのドーム屋根に覆われたモール内には、各種飲食店と小売店、病院や美容院、家電量販店などがぎっしりと建ち並び、一個の街のような堂々たる威容を誇っている。

「お、大きいですね……」

買い物客でごった返す通路を見回し、雪菜は気後れしたように呟いた。

雪菜がこれまで暮らしていたのは、世間から隔離された獅子王機関の養成施設だ。そんな彼女にとって、この未来的で華やかなショッピングモールは、さながら異世界の光景だろう。不安に思うのも無理はない。

「まあな！……こういう人の多いところは、俺もあんま好きじゃないんだけどな……」

頼りない口調で古城が答える。人混みが苦手なのは古城も同じだ。こんな騒々しい店内で、延々と女子の買い物につき合わされるのかと思うと、それだけでドッと疲労が押し寄せてくる。

一方、相変わらず元気なのは凪沙だった。いきなりテンションの下がった古城たちを励ますように、弾むような足取りで歩き出し、

「今ドキのショッピングセンターは、これくらいは普通だよ。若者向けの服なら、ここがいちばん安くて品揃えがいいんだよね。西地区のテティスモールなんかは、ちょっとお高いし、キーストーンゲートはセレブ向けすぎて論外だし」

「まあなんでもいいから、さっさと買い物を済ませてきてくれ。俺はその辺で休んでるから」

無責任な口調でそう言って、古城は通路脇に置かれたベンチを指さした。

それを見た凪沙は、乱暴に古城の腕を引き寄せ、

「駄目だよ、古城君は荷物持ちなんだから！　ちゃんとはぐれずについてきてよね！」

「マジか……つか、女物の服の売り場とか、できれば近づきたくないんだが……」
「まあまあ、そう言わずに。あたしや雪菜ちゃんに着て欲しい服があったら、リクエストを聞くだけ聞いてあげるから」
「ねーよ、そんなもんは。姫柊だって、服ぐらい自分で選びたいだろ。本人の好きにさせてやれよ」
「うーん……そうかなあ……」
予想外に素っ気ない古城の態度に、凪沙がむーっと頬を膨らます。その凪沙に手を引かれて歩いていた雪菜が、なにかに気づいて不意に足を止めた。
「あ……」
「どうした？　なにかいい服でもあったのか？」
驚きの表情を浮かべている雪菜に、古城が怪訝な口調で訊く。
雪菜はキラキラと目を輝かせながらうなずいて、
「はい。限定発売のネコマたんTシャツが……！　もう手に入らないと思ってたんですけど！」
「う……」
彼女が見つめているTシャツに気づいて、古城は表情を険しくした。
雑貨屋の店頭に置かれていたのは、間抜けなマスコットキャラを胸にでかでかとプリントした、どぎついショッキングピンクのシャツである。控え目に言ってもかなりダサい。
しかし雪菜はそのデザインを、いたく気に入っているらしい。
「古城君……ホントに雪菜ちゃんのセンスに任せて大丈夫だと思う？」
凪沙が不安そうな表情で訊いてくる。以前から薄々そんな気はしていたが、雪菜の感性は一般人とは多少ズレているのかもしれない。
「そうだな……ちょっとは監視しておいたほうがいいかもな。姫柊のためにも」
古城は頼りなく肩を落としてそう言った。
キャーッ、という人々の絶叫が聞こえてきたのは、その直後のことだった。

4

騒ぎが起きているのは、ショッピングモール中央の屋内広場だ。仮設ステージに集まった群衆を中心に、どよめきにも似た悲鳴と歓声が巻き起こっている。
「な、なんだ!?」
通路の手すりから身を乗り出して、古城は広場の様子を窺った。
妖しげな着ぐるみをまとった男が、ステージの上に立っている。ラバー製の頭部はサメを模しており、右手はザリガニのハサミ風。左手はイカの触腕である。おそらく魚介類をモチーフにした合成獣（キメラ）的なモンスターなのだろう。
サメ男に付き従っているのは、全身タイツに骸骨風のマスクを被った戦闘員たち。司会役の女性を人質にして、ステージを占拠した恰好だ。
『フハハハハハ、動くなぁ！　この広場は我々が征服したぁ！』
司会役の女性からマイクを奪って、サメ男が宣言する。それを聞いたステージの観客たちが、おおっ、と大げさにどよめいた。
『抵抗しても無駄だぁ。もし我々に逆らったらぁ、この女の命はないものと思えぇい！』
わざとらしく悲鳴を上げる司会役の女性に、サメ男がハサミを突きつける。ノリノリでステージを降りた戦闘員たちは、観客を脅して回っている。
「ったく……騒々しいと思ったら……」
一瞬、本気で警戒してしまった古城は、がっくりと落胆して手すりに突っ伏した。なにかと思えばショッピングモール主催のステージイベントだったらしい。
広場に集まっている見物客は、二百人から三百人ほど。大半が子連れのファミリー層である。恐がって泣いている幼児もいるが、彼らとて、本当に広場が占拠されたと思っているわけではない。これが演（だ）し物に過ぎないことを、誰もが理解しているのだ。
約一名、古城の隣にいる少女を除いては――
「あれは……新種の未登録魔族!?　テロですか!?」
「え？」
真剣な声を出す雪菜に気づいて、古城の表情が強張った。雪菜は背中のギターケースを下ろして、いつでも飛び出せるように身構えている。ふざけているわけではなさそうだ。彼女はイベントスタッフを、本物のテロリストだと完璧に誤解しているらしい。
「子どもを人質に……なんてことを……！」
ステージの上に招かれた幼い子どもたちを見て、雪菜の目つきがさらに鋭さを増す。猛然と彼らを助けに行こうとした彼女を、古城は慌てて捕まえた。
「待て、姫柊！　落ち着け！」
「これが落ち着いている場合ですか!?　先輩、すぐに特区警備隊（アイランド・ガード）に連絡を――！」
「だから、あれは違うんだって。ただのショーだよ。ヒーローショー」
「ヒーロー……ショー？　演技なんですか、あれが!?」
古城の懸命の説得に、雪菜がきょとんと目を瞬いた。彼女が困惑混じりに指し示したのは、ステージの上で泣き喚いている幼い少年だ。
「まあ、演技っていうか、観客参加型のアトラクションっつうか……そんな感じだ」

「アトラクション……」

半信半疑という態度ながらも、雪菜はようやく警戒を解いた。人質にされたというわりには、ステージ前の客たちに緊張感が乏しい。警備員たちが動いている気配もない。差し迫った危険がないことは、雪菜にも理解できたのだろう。

そんなこんなで古城たちが無駄な体力を使っている間に、イベントは新たな展開を見せていた。子どもたちの呼びかけに答えて、ショーの主役が颯爽と現れたのだ。アメフト風のマスクを被った、マッチョなシルエットの変身ヒーローである。

「わ、ナイトジョックスだ！」

驚きの声を上げたのは凪沙だった。なんだそれは、と古城は怪訝な表情を浮かべ、

「ナイトジョックス？　あいつの名前か？」

「テレビでやってる特撮ヒーローだよ。普段はひ弱なオタク少年が変身して、世界征服を狙うタイバッツ帝国のシゴキ獣と戦うの。子どもに人気なんだよね」

へえ、とやる気のない相槌を打ちながら、古城は客席の反応を眺めた。たしかにイベントを熱心に見入っているのは幼い子どもたちが中心だ。ステージ上のヒーローや怪人の行動に一喜一憂するその様は、いちいち純朴で可愛らしい。

だがしかし、そんな子どもたちを押しのけて、空気も読まずにステージ最前列を占拠している人々がいた。それぞれ高価そうなカメラを構えた、むさ苦しい男たちの集団だ。

「……子どもに人気ってわりには、妙に年齢層高いファンが多いな。特撮マニアってやつか？」

「ああ。あの人たちは、ほら、彼女がお目当てなんだよ」

古城の呟きに、凪沙が答える。ちょうどステージに新たな出演者が登場したところだ。ピンチに陥ったナイトジョックスを救うべく飛びこんできたのは、覆面姿の女性ヒーローだった。

「ナイトジョックスの相棒のキューティビッチ。普段は清楚な優等生なんだけど、実は猟奇殺人鬼でナイトジョックスのストーカーって設定なんだよね」

「へえ……ストーカー……」

「どうしてわたしを見るんですか？」

「いや……なんか、際どいキャラだな、と思って。いろんな意味でギリギリな感じの……」

そんなものを子ども番組に出して大丈夫なのか、と古城は思わず独りごちる。

実際、チアガールをモチーフにした覆面女性ヒーローの衣装は、不安になるくらい露出度が高かった。お腹も脇も剥き出しで、胸元がひたすら強調されている。スカート丈は破廉恥なほど短く、Tバック風の水着のボトムがほぼ常に見えている状態だ。

そんな大胆な衣装にもかかわらず、キューティビッチのアクションは意外に本格的だった。強烈な蹴り技と華麗な身のこなしで、戦闘員たちを次々に屠っていく。特撮マニアたちの

テンションが上がるのも納得だった。ヒーロー番組には興味のない古城ですら、彼女の動きにはつい目を奪われそうになる。

「――ずいぶん熱心に見てますね、先輩」

ステージを凝視する古城を咎めるように、抑揚の乏しい声で雪菜が言った。凪沙も少し意外そうな表情を浮かべて、

「本当だね。古城君、ああいうの好きだっけ？」

「そうじゃねーよ。ただ、ちょっと霧が出てきたなって」

「……霧、ですか？」

古城の言葉につられて、雪菜たちも広場の奥に目を向ける。どこからともなく洩れ出してきた霧が、うっすらと広場に立ちこめ始めていた。店内からではよくわからないが、ショッピングモールの周囲はすでに濃霧に覆われてしまっているようだ。

「なんだろ？　スモーク焚いてるわけじゃないよね？」

凪沙が首を傾げて言う。古城もそれが気になってステージ周りを見ていたのだ。

しかしヒーローショーでスモークは使われていないし、ショッピングモールで火災が発生している気配もない。本当にただの霧らしい。

「まあいいか。それよりさっさと買い物を済ませてきてくれ。俺はその辺で立ち読みでもして待ってるから」

「だから、古城君も一緒に来なきゃ駄目だってば！」

どさくさにまぎれて書籍売り場に向かおうとした古城を、凪沙が慌てて捕獲する。その直後、周囲を見回していた雪菜が、一軒の衣料品店に目を留めて、

「ま、まさか、あれは幻の黒ネコマたんスパッツ!?」

「ゆ、雪菜ちゃん……」

なにかに魅入られたようにふらふらと歩きだす雪菜を制止して、凪沙は途方に暮れたような表情を浮かべる。そんな彼女たちの足元にも、うっすらと白く靄がかかり始めていた。

5

血臭が立ちこめる地下通路を、彼女たちは溜息混じりに見つめていた。豪奢なドレスを着た小柄な女性と、侍女のように彼女に付き従う人工生命体の少女。南宮那月とアスタルテだ。

「目標を見失ったか。ひどい有様だな」

通路内に残された破壊の痕跡を眺めて、那月は苛立たしげに眉を寄せる。

通路の壁には無数の弾痕が穿たれ、床には鮮血が溜まっていた。スワニルダと名付けられた殺人人形と、特区警備隊の戦闘の痕跡である。負傷した特区警備隊の隊員たちは、すでに那月が、空間転移の魔術で病院に運び終えている。〝魔族特区〟の医療技術をもってすれば、命を落とす可能性は低いが、それでも彼らが全快するまでには相当の時間がかかるだろう。その間、特区警備隊の戦力が低下するのは否めない。

さらに問題なのは、それだけの犠牲を出しながらも、

特区警備隊（アイランド・ガード）がスワニルダを確保できなかったという事実だった。このままスワニルダを放置すれば、一般人にも新たな犠牲者が出るだろう。彼女は自らの生体組織を維持するために、他人の精気を喰らうのだ。

本来ならば、今すぐにでもスワニルダを追いかけるべきなのだろう。しかし特区警備隊（アイランド・ガード）には、彼女の追跡をためらう理由があった。ひとつは、スワニルダが地下通路内に張り巡らせた、無数の〝糸〟による罠（トラップ）の存在。そしてもうひとつは、付近を突然覆い尽くした原因不明の濃霧である。

その濃霧の正体がわからないことには、特区警備隊（アイランド・ガード）としても、危険すぎて新たな部隊を投入できない。だからこそ彼らは魔女である那月に、調査を依頼してきたのだった。

「アスタルテ、わかったか？」

藍色の髪の少女を振り返って、那月が訊く。メイド服姿の人工生命体（ホムンクルス）が持っているピクニックバスケットの中身は、携帯型の環境測定器だ。大気中の湿度や汚染物質の検出だけでなく、残留魔力の検出も可能な特注品である。

「人体に有害な成分は含まれていません。急激な温度低下による水蒸気の飽和が原因と推測」

モニタの表示を読み取ったアスタルテが、普段どおりに淡々と告げてくる。

「急激な温度低下、か……ただの自然現象ではなさそうだな」

「肯定。ザカリー・アンドレイド作の機械人形（オートマタ）が、体内に組みこまれた魔具を使用した際に、同様の現象が発生したという記録があります」

「なるほどな。大気中の熱を奪って、魔具を稼働するエネルギーを得ているわけか。魔具の種類によっては、たしかに不可能ではないだろうが――」

ふん、と那月は不愉快そうに目を眇（すが）めた。

生体人形スワニルダは、人造の肉体に機械人形（オートマタ）の部品を組みこんだ、いわば人工生命体（ホムンクルス）版のサイボーグだ。彼女の体内には刃物や銃器だけでなく、なんらかの魔具が組みこまれている可能性が高い。

本来は、主人である〝人形師〟から魔力の供給を受けて動かしていたのだろうが、大量の精気を吸った今の彼女なら、単体で魔具を起動することも、おそらく不可能ではないだろう。

「生体人形〝スワニルダ〟に搭載されている魔具の詳細は不明ですが、人工島管理公社提供の情報では、彼女が〝傀儡創造（メイク・ゴーレム）〟を使用した可能性が示唆されています」

「〝傀儡創造（メイク・ゴーレム）〟……？　人形に人形を操らせていたというのか？」

アスタルテの説明を聞いた那月が、呆れたように息を吐いた。

〝傀儡創造（メイク・ゴーレム）〟は、彫像に仮初（かりそ）めの生命を吹きこんで、意のままに操る物質操作系の魔術である。物質変成などの錬金術の要素を含むために、魔術としての難易度は高いが、力押しの戦闘以外には、ほとんど使い途（みち）のない術だった。動かないはずの彫像を無理やり動かすには大量の魔力を消費するし、複雑な命令を処理させることもできないからだ。

「噂どおり悪趣味な男だな、ザカリー・アンドレイド……しかしスワニルダは、肝心の傀儡（ゴーレム）をどこで調達するつもりだ？」

那月が怪訝な表情で呟いた。〝傀儡創造（メイク・ゴーレム）〟の魔術で操れるのは、人型に近いシルエットの人工物だけ、という制限がある。主人である〝人形師〟が死んだ今、スワニルダが、そんなものを都合良く準備できるとは思えない。

「警告。前方より識別不能の移動体が接近中です。距離約四百メートル。総数八十」

那月がその疑問の答えを出す前に、アスタルテが報告した。

闇の中から聞こえてきたのは、自動化された工場の機械のような、規則正しい足音だった。地下通路を覆う濃霧の中にうっすらと、奇怪な影が蠢（うごめ）いているのがわかる。

「八十体……だと……!?」

視界を埋め尽くすほどの傀儡（ゴーレム）の群れに、さすがの那月も頬を歪めた。主人を失ったスワニルダが、どうやってそれだけの数の彫像を手に入れたのか――？

現れた傀儡（ゴーレム）の姿を目にした瞬間、那月はその解答に辿り着く。スワニルダが、なぜこの地下水路を隠れ家に選んだのか、という疑問の答えにも――

「そうか、スワニルダ……それが貴様の目的か……！」

那月の小さな呟きは、荒々しく殺到してきた傀儡（ゴーレム）たちの足音にかき消された。

色を持たない彫像の奔流に呑みこまれて、小柄な二人の姿はたちまち見えなくなる。

軍隊蟻の群れにも似た傀儡（ゴーレム）の集団は、禍々（まがまが）しい濃霧をまといながら、着々と地上を目指している。彼女たちの頭上にあるのは、人工島西地区（アイランド・ウエスト）郊外に位置する大型商業施設――

リディアン紘神と呼ばれるショッピングモールだった。

6

「ほらほら、古城君。どうかな、これ。雪菜ちゃんとお揃いにしたりとか」

鏡の前でモデル風のポーズを取りながら、凪沙が古城に訊いてくる。彼女が腰の前で広げているのは、デニム生地のショートパンツだった。

「まあいいんじゃねーか。ちょっと短すぎる気もするけど」

「これくらいは普通だよ。うーん、こっちの色もいいよねえ。悩むなあ」

そう言って店内をグルグル回りだす凪沙。古城は呆れ顔で実の妹を眺めて、

「……つか、なんでおまえが悩んでるんだ。姫柊の私服を買いに来たんじゃねーのかよ」

「まあそうなんだけど、せっかく売り尽くしセール中だし。あ、

雪菜ちゃん、試着終わった？」
「うん。こんな感じ……だけど、どうですか？」
試着室のカーテンを開けて、着替えを終えた雪菜が顔を出す。慣れない服を着ているせいか、どことなく不安そうな表情だ。とはいえ、凪沙のアドバイスもあって、特に不自然なところはない。古城は無関心な態度で、雪菜の全身を一瞥し、
「まあいいんじゃねーか。べつになんでも」
「べつになんでも……？」
雪菜が、むっ、と頬を膨らませて古城を睨む。彼女が放つ不機嫌なオーラを感じて、古城は反射的に首を振り、
「いや……そう、姫柊ならなんでも似合うと思うって意味だからな、うん」
「はあ」
「あ、そうだ。この辺のやつはどうだ？　そのギターケースに合うと思うんだが……ほら、いつも持ち歩いてるだろ、それ」
「なるほど……それもそうですね」
古城が選んだシャツを見つめて、雪菜は感心したようにうなずいた。黒地に赤いチェック模様が入った、バンド少女風のデザインシャツだ。
しかし展示されていた商品は、明らかに雪菜のサイズよりも胸回りが大きい。買い物慣れしていない雪菜は、緊張で挙動不審になりながらも、近くにいた店員を呼び止める。
「す、すみません、こ、こちらのサイズ違いってありますか？」
「あ、はい。こちら、すぐにご用意しますね」
若い女性店員は愛想良く答えて、店裏の倉庫のほうへと入っていった。雪菜はホッと胸を撫で下ろし、着替えのために試着室へと戻っていく。
なぜか不安げな顔をした凪沙が、古城のパーカーを引っ張ってきたのはその直後だ。
「ねえ、古城君……この霧、なんか変じゃない？」
「ん？　まあ、たしかにめずらしいけどな、こんな昼間に霧なんて。天気も悪くないのにな」
「違うの。そうじゃなくて……なんか、さっきから誰かに見られてる気がするっていうか……」
そう言いかけたところで、凪沙は不意に、わっ、と叫んで古城にしがみついてきた。
「な、凪沙？」
「い、今の見た!?　霧の中で、なんか動いてた！」
窓の外を指さした凪沙が、古城の耳元で喚き立ててくる。彼女が怯えた瞳で見つめているのは、立体駐車場へと続く連絡通路だ。
「動いてた……って、そりゃまあ、いくら霧が出てても歩行者はいるだろ」
「だからそういうんじゃないんだってば！　のっぺらぼうみたいな裸の女の人が、気持ち悪い動きでカサカサって窓の外を――！」

「裸の女が……カサカサ？　だけどここって二階だよな？」
古城は困惑しながら訊き返した。ショッピングモールの構造上、窓の外は垂直に切り立った壁である。少なくとも生身の人間が、這い回れるような高さではない。
しかし騒ぎ立てる凪沙の不安を裏付けるように、少し離れた場所から新たな悲鳴が聞こえてきた。凪沙の漠然とした恐怖感とは違う、本当に追い詰められた人間の絶叫だ。
「なんだ……!?」
「さ、さっきの店員さんの声だったよ……！」
店裏の倉庫の方角を見つめて、凪沙が声を震わせる。
その間も、店員の絶叫は続いていた。なにかが暴れているような騒音も響いてくる。積んであった荷物の箱が崩れ、防火扉が引き裂かれる気配――
「誰か！　助けて、誰か――！」
店員のくぐもった叫び声を聞いて、古城は思わず走りだしていた。〝スタッフオンリー〟と書かれたドアを蹴り開けて、薄暗い倉庫へと走りこむ。
そこで古城が目にしたのは、倒れた女性店員と、彼女を襲っている裸の彫像だった。商品の展示に使う衣料品用のマネキンだ。倉庫に置かれていたマネキンが、勝手に動き出して店員を襲撃していたのだ。
「マネキン人形が、動いて……!?」
にわかには信じがたいその異様な光景に、古城は混乱して立ち竦む。
店員を襲っていたマネキンが、ギシギシと首を回して古城を見た。白い合成樹脂で成形された、女性型の彫像だ。外国人風の彫りの深い顔立ちと、女性らしさを強調した人工的なプロポーション。どこの衣料品店でも普通に見かける、ごくありふれたマネキンである。動力や仕掛けが組みこまれている様子もない。
「凪沙が見たのっぺらぼうってのは、こいつらか……」
わけがわからないまま、古城はマネキンに向かって走り出す。人形が動いている理由を考えるより、襲われている店員を助け出すのが先だと考えたのだ。
だが、その瞬間、凪沙が再び悲鳴を上げた。恐怖に目を見開いた彼女の視線は、古城の頭上へと向けられていた。
「こ、古城君――！」
「なっ!?」
頭上から落下してきた新たなマネキン人形を、古城はギリギリで回避する。マネキンは鉄骨を剥き出しにした倉庫の天井に張りついて、古城が近づくのを待っていたのだ。ただの人形が考えたとは思えない、邪悪で狡猾な罠だった。
落下の衝撃でマネキンの胴体には亀裂が入り、左手の手首から先は吹き飛んでいる。しかしマネキンは自らの損傷を気にすることもなく、そのまま古城へと攻撃を仕掛けてくる。
「うおっ！」

マネキンが、折れた左手首の鋭い断面を、古城の顔面目がけて突き出した。人形の攻撃には殺意がない。関節の数が限られているせいか、動きも人間とは違っている。おかげで攻撃動作が予測しづらい。緩慢な動きのわりには厄介な相手だ。

それでもどうにか敵の攻撃をかわして、古城はそのまま反撃に転じた。攻撃直後でガラ空きになったマネキンの胴体を、力任せに殴りつける。

「ぐ……!?」

しかし古城の拳に伝わってきたのは、プラスチックの塊を殴りつけた不快な衝撃だけだった。マネキンは受け身も取らずに転倒するが、ダメージを負っている気配はない。そのまま何事もなかったように、ガシャガシャと四肢を蠢かせて起き上がる。むしろ痛みを訴えていたのは、殴った古城の手のほうだ。

「硬ってェ、クソッ……やっぱこいつ本物のマネキンなのかよ!?」

痺れた右手を振りながら、古城がチッと舌打ちする。

その古城の足首が、不意に伸びてきた何者かにつかまれた。女性店員を襲っていたはずのマネキンが、いつの間にか古城の足元に忍び寄っていたのだ。

「こいつ――!?」

バランスを崩した古城を目がけて、もう一体のマネキンが猛然と絡みついてきた。二体のマネキンに押し潰されて、古城は壁際へと倒れこむ。樹脂製の冷たい指先が、古城の喉元に喰いこんだ。マネキンはそのまま凄まじい握力で、古城の気管を押し潰そうとする。

「先輩っ！」

一瞬、遠のきかけた古城の意識をつなぎ止めたのは、雪菜の澄んだ叫び声だった。樹脂の破片を撒き散らしながら、マネキンの頭部が、がくん、と仰け反る。

異変を察して駆けつけてきた雪菜が、倉庫にあったパイプハンガーの支柱でマネキンを殴りつけたのだ。無表情な顔面が砕け散り、マネキンの首がへし折れた。古城の喉を絞めていた指先から力が抜ける。

その隙を逃さずに、古城は背後にいたマネキンの腕をつかんだ。一本背負いの要領で相手を持ち上げ、そのままもう一体のマネキン目がけて叩きつける。

「姫柊、そいつを貸せ！」

「はい、先輩！」

古城は、雪菜からパイプハンガーの支柱を受け取った。さすがに業務用だけあって、支柱の材質は頑強なステンレススチールだ。

「これならっ――！」

絡み合って床に倒れた二体のマネキンを目がけて、古城は、その支柱を突き立てた。支柱は見事にマネキン二体を貫通し、そのまま彼女たちを床へと縫い止める。

マネキンたちは死にかけた昆虫のように手脚を痙攣させて

いたが、やがて力尽きて、ゆっくりと動きを止めた。

「なんだったんだ、こいつら……」

マネキン二体の停止を確認して、古城は床にへたりこむ。

雪菜は倒れた女性店員に駆け寄って、彼女の介抱を始めていた。女性店員に目立った外傷はないが、呼吸が浅く、ひどく顔色が悪い。単なる恐怖による症状だけではなさそうだ。

「大丈夫ですか……!?　ゆっくり息を吐いてください！　落ち着いて……！」

「姫柊？　店員さんの怪我はまずいのか……？」

「いえ、軽い打撲と擦り傷だけです。ですが、かなり衰弱しています」

「衰弱……？」

「おそらく大量の精気を吸われてしまったのではないかと」

「精気を吸われた……って、マネキンにか？」

訊き返す古城を見上げて、雪菜は首を振った。

「どこかにマネキンを操っていた術者がいるんです。もしかしたら、この濃霧とも無関係ではないのかも――」

「……霧？」

古城は周囲を見回してハッとする。気づかないうちに霧が濃さを増していた。

すでにショッピングモールの通路は、ほとんど視界が利かない。古城たちのいる店の中にも、白く濁った大気が流れこんでくる。

「古城君っ……！」

戸惑う古城を、凪沙が怯えた声で呼んだ。青ざめた彼女が見つめていたのは、ショッピングモールのエスカレーターホールだった。

「凪沙？　どうした!?」

「あ、あれ……」

震えながら凪沙が指さした場所には、四つん這いで壁に張りついたマネキン人形の姿がある。それも一体や二体ではなかった。その数は全部で数百体以上――

その大半は、華麗にコーディネイトされた流行の衣服を身に着けている。ショッピングモール内に展示されていたすべてのマネキンたちが勝手に動きだし、人を襲う怪物と化して霧の中を蠢いているのだ。

「冗談……だろ……」

掠れた声を出す古城の眼前で、マネキン人形の大群が一斉に活動を開始する。

霧の中から現れた人形の群れに襲われて、買い物客たちが悲鳴を上げた。その悲鳴が連鎖して、ショッピングモール内に反響していく。パニックが引き起こされるまで、数十秒とかからない。大混乱に陥る人々の姿を、古城たちは為すすべもなく呆然と見つめていた。

7

古城たちのすぐ傍で、ガラスが砕け散る音がした。動きだしたマネキン数体が、古城たちのいる衣料品店にまで入りこんできたのだ。商品を展示していたハンガーが次々に雑ぎ倒されて、店内にいた数人の客が悲鳴とともに逃げ惑う。

「なんなんだ、こいつら!?　なんでマネキンが勝手に動く……!?」

店内清掃用のモップを構えながら、古城は苦々しげに呟いた。武器と呼ぶには頼りないが、素手でマネキンを殴るよりはいくらかマシなはずだ。

「〝傀儡創造〟です。彫像に仮初めの生命を与えて、術者の意のままに操る魔術――この霧を魔術の伝達物質に使っているのだと思います」

戸惑う古城に、小声で囁いてきたのは雪菜だった。

「魔術？　それって、こんなマネキン相手にも有効なのか？」

「理論的には。ですが、これだけの数の傀儡を同時に操るのは、人間の術者には不可能です。傀儡からのフィードバックに脳や神経が耐えきれません」

「人間じゃない……って、じゃあ、いったい誰が……!?」

古城が混乱して訊き返す。マネキンたちが操られているということは、魔術を使った術者がどこかにいるということだ。

だが、誰がなんの目的で、そんなことをしているのかはわからない。相手が人間ではない、というのなら尚更だ。

「わかりません。ですが、術者の目的は、たぶん――」

曖昧に首を振りながら、雪菜がなにかを言いかけた。しかし彼女の言葉が終わる前に、古城たちの背後にいた凪沙が悲鳴を上げる。濃霧の中から現れた新たなマネキンが、凪沙に襲いかかったのだ。

「いやあああああああっ！」

「凪沙……っ！」

古城が慌てて凪沙に駆け寄る。しかしマネキンの動きが速い。凪沙の制服の裾をつかんで、そのまま霧の中へと彼女を引きずりこもうとする。

このままでは凪沙を見失ってしまう、と古城が恐怖を覚えたとき、悲鳴を上げ続ける凪沙の傍に、新たな人影が現れた。頭部に角を生やした巨大な体躯の持ち主だ。

「オラァッ！」

野獣のような咆吼とともに、巨漢がマネキンの胴体を粉砕する。常人にはあり得ないデタラメな破壊力だった。物理的な腕力だけなら、吸血鬼である古城を遥かに凌いでいる。

「大丈夫か、嬢ちゃん？」

野太い声で男が言う。凪沙は蒼白な顔でうなずくのが精一杯だ。〝魔族特区〟の住人でありながら、凪沙は魔族恐怖症なのである。たとえ自分を助けてくれた恩人が相手でも、潜在

意識下に刻まれた恐怖はぬぐえない。

「……あんた、獣人か」

弱々しく震えている妹に代わって、古城が訊いた。男は鷹揚にうなずいてみせる。幸い彼は凪沙の態度を、特に気にしてはいないようだ。凪沙の恐怖が、自分に向けられたものではなく、マネキンに襲われたショックのせいだと勘違いしたのかもしれない。

「さすがに非常事態だからな。この状況なら獣化してもお咎めはなしだろ」

「ああ。ありがとう、助かったよ」

豪快に笑う獣人の男に、古城は感謝の言葉を伝えた。

男の口振りからすると、彼は絃神島の市民権を持つ登録魔族なのだろう。古城たちと同様に、ただの買い物客としてショッピングモールを訪れて、事件に巻きこまれただけなのだ。

いくら〝魔族特区〟といえども、魔族が市街地で許可なく特殊能力を使うのは、原則的に禁止されている。とはいえ彼の言うとおり、明らかに例外的な状況だ。強靭な肉体を持つ獣人種が近くにいてくれるのは、今はむしろ頼もしい。

「凪沙ちゃん、立てる？」

「う、うん……大丈夫」

雪菜の手を借りながら、凪沙がどうにか立ち上がる。その光景に安堵しながらも、古城は、焦りを感じていた。店を取り囲むマネキンたちが、徐々に数を増している。まるで古城たちの存在に引き寄せられているかのように――

「どうなってるんだよ、これは!?　ますますマネキンどもが増えてるじゃねーか！　とにかく、逃げるぞ。とりあえず少しでも霧の薄いほうに――うおっ!?」

「おっさん――！」

濃霧の中から飛び出してきたマネキンの群れが、獣人の男を背後から襲った。

同時に六体ものマネキンにまとわりつかれては、獣人の腕力を持ってしても振りほどくのは不可能だった。しかもこのマネキンには、触れた相手の生命力を奪うという恐るべき特殊能力が備わっている。一瞬で大量の精気を吸われて、獣人の男はその場に膝を突いた。

男を援護するために古城が振るったモップは、マネキン一体を無力化する前にへし折れた。愕然とする古城の隣を、小柄な影が走り抜ける。

膝立ちで苦悶する獣人の胸元に、掌を向けていたのは雪菜だった。

「響よ！」

雪菜が放った強烈な打撃は、獣人の男の身体を素通りし、彼の背後のマネキンだけを正確に粉砕した。練り上げた呪力を浸透させて、マネキンたちの内部で炸裂させたのだ。

店内に満ちた濃霧に阻まれて、雪菜の動きは凪沙からは見えていない。たとえ見られていたとしても、凪沙には、雪菜

がなにをしたのかはわからなかったはずだ。
「やられた……ぜ……くそっ！」
残った最後の一体を振り払って、獣人の男が立ち上がる。だいぶ消耗しているが、動けないほどではないらしい。雪菜の助けがあったとはいえ、獣人ならではの頑強な肉体の賜物だ。
しかし彼を救おうとしたことで、結果的に古城と雪菜は、凪沙から一瞬目を離してしまった。新たなマネキンの集団が店内に雪崩れこんできたのは、その直後のことだった。
「こ、古城君っ――！」
「凪沙!?」
マネキンたちの強襲によって、古城たちは凪沙と分断される。
恐怖で身動きできない凪沙を、間一髪でマネキンたちから救ったのは獣人の男だ。消耗した彼は最後の力を振り絞ってマネキンたちを蹴散らし、凪沙のための逃げ道を切り開く。幸いなことに彼らが向かった階段側の通路に、マネキンたちの姿は少ない。
「逃げろ、凪沙！　俺たちもすぐに追いかける！」
「う……うん……」
半ば放心状態と化していた凪沙は、古城の命令に機械的に反応した。近くにいたほかの買い物客に急き立てられるようにして、屋上へと続く階段を上り始める。
とりあえず凪沙の安全を確保したことで、古城たちにも若干の余裕が出来た。
雪菜が背中のギターケースから、全金属製の銀色の槍を抜く。
正式名は七式突撃降魔機槍。〝雪霞狼〟の銘を与えられた獅子王機関の秘奥兵器だ。しかしこの濃霧の中なら、ほかの買い物客に目撃される心配はないと考えたのだろう。
「先輩、ここはわたしが――！」
「悪い、頼む！」
古城の返事を聞く前に、雪菜が銀色の槍を一閃した。斬りつけられたマネキンたちが、次々に活動を停止する。破魔の力を持つ雪菜の槍が、マネキンたちの動力源である〝傀儡創造〟の魔術を無効化したのだ。
しかし感情を持たないマネキンの群れが、雪菜の反撃に恐怖を覚えることはない。雪菜が倒した仲間の残骸を乗り越えて、次から次へと新たなマネキンが現れる。〝雪霞狼〟の力だけで押し切るには、敵の数はあまりにも多すぎた。押し寄せてくる樹脂人形たちの軍勢に、古城たちは次第に追い詰められていく。
「なんなんだ、こいつら!?　いったいなにが目的でこんな……!?」
逃げ惑う人々の悲鳴に苛まされながら、古城が奥歯を軋ませた。濃霧のせいで正確な状況はわからない。しかし店を包囲するマネキンは、明らかに数を増していた。マネキンたちは

吸い寄せられるように、古城の周囲に群がってきているのだ。
「やっぱり、彼女たちは先輩を狙って――！」
雪菜が槍を振るいながら、唇を噛んだ。彼女の言葉で古城も確信する。マネキンの群れを操っている〝傀儡創造〟の術者――傀儡使いの標的は古城だ。
だとすれば、捕らえた獲物の生命力を奪う能力が、マネキンに与えられた理由もわかる。第四真祖の持つ膨大な魔力の源――無尽蔵ともいえる〝負の生命力〟を奪うこと。それが敵の目的なのだ。この事件に古城が巻きこまれたのは偶然ではない。
「このままじゃキリがない。姫柊、外に――！」
「はい！」
マネキンの包囲が手薄になった一瞬の隙を衝き、古城たちは店の外に飛び出した。複数のモールを連結している高架状の連絡通路である。
外からの空気が流れこんでいるせいか、モール内のほかの場所に比べて、霧が薄い。殺意に似た強い視線を感じて、古城はハッと顔を上げる。
「あいつは……!?」
ショッピングモール中央のガラス天井に、一体の人形がへばりついていた。蜘蛛に似た八本脚の下半身を持つ、純白の髪の人形だ。
「スワニルダ……！」
彼女の姿に気づいて、呟いたのは雪菜だった。その呟きが届いたのか、純白の髪の人形が、ゾッとするような妖しい笑みを浮かべてみせる。
見えない糸を操るように、スワニルダが右手の指を曲げた。濃霧の中から湧き出るように、古城たちの頭上へと新たなマネキンたちが降りそそぐ。
「うおおおおおおおおおおっ！」
濁流にも似たマネキンたちの群れに押し流されて、古城は通路から落下した。濃い霧の中に呑まれていく古城を、スワニルダは瞬きすることもなく無言で眺めていた。

8

黄金の稲妻が、ショッピングモールの通路を駆け抜けた。
その熱と衝撃をまともに喰らって、マネキンたちの大群が弾け飛ぶ。稲妻の正体は、古城の肉体から洩れ出した魔力。命の危機に陥った古城が、無意識に世界最強の吸血鬼の力を発動させてしまったのだ。
暴走と呼ぶほどでもない、ほんの一瞬の出来事である。しかし巨大すぎる第四真祖の魔力は、そのごくわずかな漏出だけでも、周囲に凄まじい破壊を撒き散らす。古城にのしかかっていた数十体のマネキンは、その一撃で焼き尽くされて、付近にあった照明器具や電子機器も軒並み破壊されていた。損

害額は数百万円といったところだろう。
「先輩！」
銀色の槍を握った雪菜が、二階の通路から飛び降りてくる。呪力によって脚力を強化しているのか、危なげのない着地だった。
焼け焦げたマネキンの残骸の中から、傷だらけになった古城が起き上がる。
「悪い、姫柊……怪我はないか？」
「わたしは大丈夫です。ですが、あの人形には逃げられました」
そう言って雪菜は頭上を見上げた。
天井に八本脚の人形の姿はない。濃霧にまぎれて姿を消したのだ。
「スワニルダ……とかいったな。その名前って、たしか……」
「はい。アスタルテさんと同じ魔術師に造られた生体人形です。人工生命体（ホムンクルス）の肉体に魔具を埋めこんだ、半人半機械の自律兵器」
雪菜が硬い声で答えてくる。
朦朧（もうろう）とした記憶しか残っていないのだが、古城は過去に、その生体人形と接触したことがあるらしい。正面きっての戦闘で雪菜を追い詰めるほどの、凶悪な敵だったと聞いていた。
「そいつの狙いは俺やアスタルテじゃなかったのか？　どうして無関係な買い物客を襲ってるんだ？」
「わかりません。ですが、さっきの彼女は、わたしが最初に戦ったときとは、見た目も雰囲気も違ってました。彼女を操っているはずの魔術師の気配もありませんでしたし」
「主人である魔術師の命令を無視して、暴走してるってことか……？」
「その可能性は高いです。もしかしたら彼女は大量の魔力を集めて、先輩に対抗する力を手に入れようとしているのかも――」
「魔力を集める？　ってことは、このマネキンたちはスワニルダが一人で操ってるのか？」
古城は唖然として訊き返す。暴れているマネキン人形の総数は、おそらく五百体を超えているはずだ。それをたった一体の人形が操っているなどと、容易に信じられることではなかった。
「彼女の体内に〝傀儡創造（メイク・ゴーレム）〟と同じ効果を持つ魔具が埋めこまれているのだと思います。機械人形（オートマタ）の演算能力を使えば、数百体の傀儡（ゴーレム）を操ることも不可能ではないはずですから」
「魔具……か」
古城が不機嫌な息を吐く。スワニルダの設計者は、人工生命体（オートマタ）に眷獣（けんじゅう）を植えつけるという非人道的な実験を行う人間だ。自分の作品に魔具を仕込むくらいのことは、平然とやってのけるだろう。
スワニルダの行動目的は、大量の魔力を集めること。
そんな彼女にとって第四真祖の膨大な魔力は、願ってもない標的だろう。古城たちは事件に偶然巻きこまれたわけではない。古城たちがここに来たから、ショッピングモールは襲撃されたのだ。数百体のマネキンが置かれたショッピングモールは、彫像を操るスワニルダにとって、もっとも有利な戦場だからだ。だが――
「それならスワニルダを止めれば、マネキンたちの動きも止まるってことだよな？」
古城は無意識に獰猛（どうもう）な笑みを浮かべていた。この事件がスワニルダ一体に仕組まれたものだというのなら、解決の方法はシンプルだ。彼女（スワルニダ）を倒してしまえばいい。この濃霧の発生も、マネキンたちの暴走も、おそらくそれで終わるはずだ。
「そうですね。先輩の眷獣をぶつければ、たとえ今の彼女でも確実に倒せると思います」
雪菜が表情を曇らせながらうなずいた。
「ただ、そうなると問題は……」
「凪沙……か」
「はい」
「バレる、よな」
「バレますね」
古城が苦悩の表情で呟き、雪菜も唇を噛んで同意する。
このショッピングモールの内部には、何百人もの買い物客が閉じこめられている。その中には凪沙も含まれているのだ。しかも不都合なことに彼女たちは、なるべく霧の薄い屋上を目指して逃げていた。古城がスワニルダと戦えば、その姿は凪沙にも目撃されることになるだろう。
当然、古城が吸血鬼だということもバレる。
魔族恐怖症である凪沙に知られてしまうのだ。が、
「いや……案外そうでもないかもしれないぜ……」
追い詰められて頭を抱えていた古城が、ぼそり、と唐突に呟いた。
「先輩？」
雪菜が訝（いぶか）しげな視線を古城に向けてくる。
しかし古城はなにも答えない。古城が見つめていたのは、正面にある無人の広場の中央だ。
そこにあるのは半壊した仮設ステージと、その裏側の出演者控え室だった。

9

無事だった買い物客のほとんどは、ショッピングモールの屋上に集まっていた。自主的に避難したというよりは、マネキンたちの襲撃から必死で逃げ惑っているうちに、自然と辿り着いたのだ。むしろ逃げ場のない屋上に、追い詰められたという状況に近い。
避難者の人数は七、八百人ほど。その中には暁凪沙の姿もあった。
「落ち着いて！　皆さん、落ち着いてください」

ショッピングモールの責任者らしき人物が、声を張り上げて叫んでいる。

それでも人々のざわめきは消えない。啜り泣く子どもたちの声が耳に障る。

「心配ありません。特区警備隊がこちらに向かっているそうです。濃霧のせいで到着が遅れていますが、間もなく到着する予定ですから――」

「間もなく!? 間もなくっていったいいつなんだよ!?」

中年の男性客が、余裕のない口調で責任者に喰ってかかる。

それにつられて屋上のあちこちで不満の声が上がった。

「どうなってるんだ、このショッピングモールは！」

「あのマネキンは、この店の備品じゃないのかよ!?」

「そ、それは――」

責任者が、今にも泣き出しそうに顔を歪めた。彼とて事情はわかっていないのだ。ショッピングモールが雇った警備員のほとんどは、真っ先にマネキンたちの襲撃を受けて連絡が途絶えてしまっていた。

「古城君……」

凪沙は屋上の片隅に座って、いがみ合う大人たちから目を逸らしていた。彼女を助けてくれた獣人の男とは、途中ではぐれてしまっている。代わりに凪沙の周囲にいたのは、年端のいかない子どもたちだ。彼らを懸命に励ますことで、凪沙自身どうにか平静を保っていたのだった。

そんな凪沙たちの背後から、抑揚のない機械的な声が聞こえてくる。

「新規生命力供給源を目視にて確認――」

同時に屋上のあちこちで悲鳴が上がった。

金属製の脚をガシャガシャと鳴らして強引に壁をよじ登ってきたのは、無数のマネキンを従えた純白の髪の人形だ。蜘蛛に似た八本脚の下半身と、焼けただれた右半身。その姿は、中高生の女子の間で噂になっている殺人人形そのものだった。

「ひ、ひいっ!?」

「う、うわあああああっ！」

マネキン人形に襲われた人々が、絶叫とともに逃げ回る。しかし屋上の出入り口は、すでに人形たちに封鎖されていた。もはやどこにも逃げ場はない。この屋上は殺人人形の餌場なのだ。

「魔具稼働率七十六パーセント。接続中の傀儡総数は四百五十七。損傷三十八。損耗率七・七パーセント。作戦継続に支障なし」

白い髪の殺人人形が、無表情のまま周囲を睥睨する。

やがてその視線が一点に注がれた。彼女が見つめていたのは凪沙だった。殺人人形と目を合わせて、凪沙が小さく息を呑む。

「膨大な潜在魔力保有者を確認。最優先目標に設定。執行せよ――」

殺人人形が静かに告げた。フェンスを乗り越えてきたマネキンたちが、一斉に凪沙を振り返る。

「なに……？　なんなの、これ？」

凪沙は恐怖に震えながら目を閉じた。どうして自分が狙われているのか、もちろん凪沙にはわからない。わかっているのは、もはやどこにも逃げられないということだけ。殺到してくるマネキンたちの足音が凪沙の耳朶を打つ。なにかが砕け散る轟音が鳴り響く。

「古城君……っ！」

凪沙は無意識に兄の名を呼んでいた。その直後、彼女たちの耳元で、わっ、と子どもたちの歓声が上がった。熱風が凪沙の前髪を揺らし、声もなくマネキンたちが吹き飛ぶ気配がある。

「損耗率上昇。作戦行動に障害発生。排除を開始する」

感情を持たないはずの殺人人形の声に、かすかな動揺が混じっていた。

凪沙は怖ず怖ずと瞼を開ける。彼女の周囲にいる子どもたちが浮かべていたのは、満面の笑み。そして輝くような期待の表情だ。

眩い雷光をまとった人影が、屋上に現れたマネキン人形を蹴散らしていく。普通の人間ではあり得ない凄まじい戦闘能力だ。

しかし凪沙は、彼の戦いを見ても恐怖を覚えなかった。なぜなら、その人物は魔族ではなかったからだ。アメフト風のマスクを被り、派手なスーツに身を包んだその姿は――

10

「ナイトジョックス……!?」

凪沙たちを救うために颯爽と屋上に駆けつけたのは、特撮ヒーロー、ナイトジョックスその人だった。

「ナイトジョックス……？」

「え……本物……!?」

「ナイトジョックスだ！　ナイトジョックスだよ！」

「それって、さっきヒーローショーに出てた……」

屋上に避難していた人々の間に、静かなどよめきが広がっていく。

特撮番組のヒーローが、イベントに出演していたはずの姿そのままで、怪物に襲われていた人々を助けに現れたのだ。あまりにも馬鹿げたその光景は、人々の思考を停止させ、彼らを恐怖から解放するのに十分なインパクトを持っていた。

「くそ……目立ちすぎだろ、このスーツ……」

四方から突き刺さる視線を感じて、古城はマスクの下の顔を赤面させている。

古城が、イベントステージに置き去られていたナイトジョックスの衣装を着て出てきたのは、人々を勇気づけることが目的だったわけではない。古城はただ単に自分の素性を隠したかっただけなのだ。自分が吸血鬼だということを、凪沙に

気づかれないようにするためである。
「ようやく見つけたぜ、スワニルダ。ずいぶん派手にやらかしてくれたじゃねーか」
それでも古城は、群がるマネキンたちを振り払いながら、スワニルダの前に出た。
赤い手袋を嵌めた古城の拳が、洩れ出した魔力で、青白い稲妻に包まれる。
抑えきれない怒りのせいで、魔力が暴走を始めている。スワニルダは、凪沙を危険な目に遭わせた。そのことが古城の逆鱗に触れたのだ。
「質問――なぜ私の邪魔をするのですか？」
白い髪の人形が、感情のない瞳を古城に向けてくる。魔力を感知する彼女はすでに、古城の正体に気づいているのだろう。古城の奇妙な衣装を見ても、彼女は表情を動かさない。
「私の目的は〝永遠〟を手に入れること。それが人形師様から与えられた存在意義。それなのに、あなたは試験体に〝永遠〟を与えた。人形師様の最高傑作たる私ではなく、あの出来損ないの廃棄品に――」
スワニルダの声がかすかに震えた。彼女が初めて露わにした感情は、怒りと、そして妬みだった。彼女はアスタルテに嫉妬しているのだ。古城から魔力の供給を受けることで、〝永遠〟を手に入れた――世界初の眷獣共生型人工生命体という〝名誉〟を得ることになったアスタルテに。だが、
「〝永遠〟だと……!?　アスタルテがいつそんなものを望んだよ？」
怒気を孕んだ古城の声が、スワニルダの言葉をかき消した。
「アスタルテは俺に逃げろと言ったぞ。紘神島を沈めるための道具として利用されながらも、あいつは一人でも多くの人間を救おうと必死だった。誰に命令されたわけでもなく、自分のために人を傷つけてるおまえとは違うんだよ！」
「……理解不能。理解不能。私は正常に作動しています」
スワニルダが冷たく告げてくる。彼女の左腕が左右に割れて、中から巨大な山刀が飛び出した。山刀の刃には、どす黒い汚れがこびりついている。彼女がこれまで傷つけた人々の血痕だ。
「そうかよ。だったら力尽くで止めるしかないよな――」
古城が、稲妻に包まれた右腕を振った。スワニルダを護るように集まっていたマネキンの群れが、その一撃で粉々に砕け散る。勢い余ってショッピングモールの建物にも亀裂が走ったが、今の古城にはそんなことは些細な問題だった。正体がバレなければどうということはない。
「星降る夜の体育会系、ナイトジョックス見参！　ここから先は、俺の正義だ！」
とりあえず自分の素性を隠すため、見よう見まねで名乗りを上げておく。
それを聞いていた子どもたちが、ワッと歓声を上げた。彼らの歓喜は大人たちにも伝播して、やがて屋上全体を揺るがすほどの声援へと変わる。
そんな異様な雰囲気の中でも、スワニルダは冷静だった。
彼女の右手から伸びた鋼鉄製の糸が、近くにいた買い物客たちを引き寄せる。古城の攻撃から自らを守るため、無関係の人間を楯に使おうとしているのだ。
動けなくなった古城を目がけて、左右からマネキン人形たちが飛びかかってくる。古城を応援していた人々が、それを見て口々に悲鳴を上げた。
しかしマネキンの攻撃が、古城に届くことはなかった。
大気を裂いて走り抜けた銀色の閃光が、彼女たちを無力化していたからだ。
「いいえ、先輩。わたしたちの正義、です！」
古城の隣に寄り添うようにして立っていたのは、〝雪霞狼〟を構えた雪菜だった。彼女の服装を見た古城は、マスクの下でぽかんと目を丸くする。
「ひ、姫柊!?　おまえ、その恰好……」
「あんまりじろじろ見ないでください！」
脚の付け根を懸命に隠しながら、雪菜が古城を睨みつけてくる。
彼女が身に着けていたのは、チアガールをモチーフにした女性特撮ヒーローの衣装だった。肩や胸元を大胆に露出したノースリーブの上着。おまけ程度の超ミニスカートの下にはTバック風の水着のボトム。せめてもの救いは覆面で目元が隠れていることか。
「ま、真夜中の可憐な監視者、キューティビッチ！」
半ば自暴自棄になった勢いで、雪菜が槍を旋回させて叫ぶ。
おおっ、というどよめきがショッピングモールの屋上を震わせた。凄まじい勢いでカメラのフラッシュを焚いているのは、屋上に逃げこんでいた特撮マニアたちだ。「なんだ、あの槍？」「新しい装備か!?」「いつ発売だ？」というような彼らのマニアックなやりとりが、古城の耳にも聞こえてくる。
「行きますよ、先輩！」
恥ずかしさを振り払うように雪菜が叫んだ。音もなく突き出された銀色の槍が、行く手を阻むマネキンたちを貫き、本職のスーツアクターを超える鮮やかな体術で、雪菜はスワニルダの懐へと潜りこむ。
〝雪霞狼〟の刃が鋼糸を斬り裂いて、人質になっていた人々を解放した。瞬きする間もない刹那の出来事だ。
「〝焔光の夜伯〟の血脈を継ぎし者、暁……いや、ナイト・ジョックスが、汝の枷を解き放つ――！」
押し寄せてくるマネキンの群れを目がけて、古城は右腕を突き出した。そこから噴き出した深紅の血霧が、雷光をまとう巨大な獅子の姿へと変わる。自らの意思を持って実体化するほどの濃密な魔力の塊――第四真祖の眷獣だ。
「疾く在れ、五番目の眷獣〝獅子の黄金〟――！」

全長十メートル近くにも達する雷光の獅子が、マネキンの群れを蹴散らした。

第四真祖が従える十二体の眷獣は、それぞれが天災にも匹敵する非常識な破壊力を持っている。樹脂人形が何百体束になったところで、端から勝負になるはずもなかった。

スワニルダの肉体が、雷に打たれたように帯電して震えた。破壊された傀儡のダメージが、スワニルダの体内に埋めこまれた〝傀儡創造(メイク・ゴーレム)〟の魔具を通じて、術者である彼女を苦しめているのだ。

「もうやめろ、スワニルダ！」

苦悶する殺人人形に、古城は懸命に呼びかけた。強力すぎる古城の眷獣は、これ以上戦えば確実にスワニルダを破壊してしまう。それはスワニルダ自身にもわかっているはずだ。

だがそれでもスワニルダは、古城の言葉を受け入れようとはしなかった。

「命令拒否(ディナイ)……命令拒否(ディナイ)命令拒否(ディナイ)命令拒否(ディナイ)！」

スワニルダの腹部が大きく割れた。その中から現れたのは大口径の機関砲だった。最後に残されたその武器を、彼女は無差別に乱射しようとしている。

古城がそれに気づいたときには、すでに雪菜は動き出していた。

「――獅子の神子(みこ)たる高神(たかがみ)の剣巫(けんなぎ)が願い奉(たてまつ)る」

銀色の槍とともに、雪菜が舞う。神に勝利を祈願する剣士のように。あるいは勝利の預言を授ける巫女(みこ)のように。彼女の槍を包みこんだのは、神格振動波の眩い輝きだ。

「破魔の曙光(しょこう)、雪霞(せっか)の神狼(しんろう)、鋼(はがね)の神威(しんい)をもちて我(われ)に悪神百鬼(あくじんひゃっき)を討(う)たせ給(たま)え！」

閃光とともに放たれた槍が、スワニルダの胸元を貫いた。

その瞬間、スワニルダの全身が凍りついたように動きを止める。自らの意思では動くことができない、ただの美しい人形のように――

「起動コアに深刻な損傷が発生。制御不能。全武装起動不可……戦闘続行は困難と判断。人形師様(マイスター)、指示を……人形師様(マイスター)……」

大きく瞳を見開いたまま、スワニルダが呟き続けている。機械仕掛けの脚から力が失われて、彼女の身体が大きく傾いた。そのまま落下しようとした彼女を、抱きとめたのは古城だった。

「終わりだ、スワニルダ。おまえはもう、戦わなくていい……そのまま眠ってろ、永遠にな」

「永遠……に……」

古城の言葉を耳にした瞬間、スワニルダが浮かべたのは満足げな安らぎの表情だった。

「命令受諾(アクセプト)……」

純白の髪の人形が瞼を閉じる。それきり彼女が目を開けることはなかった。

動かなくなった人形をそっと横たえて、古城は小さく溜息をつく。

消え残る白い霧の中で、スワニルダは穏やかに眠っていた。彼女はようやく手に入れたのだ。暴走するほどに求め続けていた〝永遠〟を――

11

一夜が明けた月曜日の早朝――

古城はいつものように自宅を出て、通学用のモノレールに揺られていた。隣には同じく登校中の雪菜の姿もある。

始業時間にはまだ余裕があって、そのせいか車内はめずらしく空いている。しかし、吊革につかまる二人の表情には、色濃い疲労の跡がくっきりと残されていた。

「まったく昨日は酷い目に遭ったぜ……」

虚ろな目で窓の外を眺めながら、古城が深々と溜息をつく。

そんな古城の横顔を見上げて、雪菜は弱々しく微笑んだ。

「本当ですね。あれだけの騒ぎで死者が出なかったのは幸いでしたけど」

「スワニルダだけでも厄介だったってのに、ガキどもにまとわりつかれたのがきつかったな。逃げ切れなくて死ぬかと思った」

「わたしは、握手を求めてくる男の人たちの集団に追い回されて大変でした……」

お互い自嘲混じりにそう言って、古城と雪菜はぐったり肩を落とす。

ナイトジョックスの仮装でスワニルダの暴走を喰い止め、人々を救ったところまではよかったが、真に大変だったのは、それからあとのことだった。逃げ出すタイミングを逸した古城たちは、屋上に避難していた人々に、命の恩人として取り囲まれてしまったのだ。

興奮した大人たちや遠慮を知らないガキどもにもみくちゃにされて、正体がバレそうになったのも一度や二度ではない。なんとか素顔を隠して逃げ切れたのは、ほとんど奇跡に近かった。

特区警備隊の部隊が現場に到着したのは、それから間もなくのことだった。負傷者は直ちに彼らに救助され、特に大きな混乱もなく事件は収束した。

スワニルダを回収したのは南宮那月だった。

古城たちを驚かせたのは、スワニルダの主人である〝人形師〟がすでに殺されていたことだ。製作者を殺した人形として、スワニルダの名前は大々的に報道され、新聞やネットの記事を通じて、世間の人々は彼女の姿を知ることになった。

かつての美しかった彼女の姿を――

「……〝永遠〟に美しいまま、か……案外、願いは叶ったのかもしれないな」

古城は口の中だけでぼそりと独りごちる。

見えない棘のように古城の胸の奥に刺さっていたのは、彼女

を救えなかったという苦い思いだった。ほんの小さな歯車のズレが、スワニルダの運命を狂わせた。それがなければアスタルテのように、彼女ともわかり合えていたかも知れないのだ。

「先輩？」

落ちこむ古城の表情を、雪菜が気遣うように覗きこんでくる。古城は、気分を切り替えるように、首を振って苦笑してみせた。

「いや、なんでもない。それより、結局、昨日は服を買えなかったよな」

「あ、はい。そうですね。もしよかったら、また、買い物につき合ってもらえますか？」

「ああ、もちろん。今週末にはリディアン絃神も営業を再開してるだろうしな」

「ありがとうございます。黒ネコマたんスパッツが売り切れてないといいんですけど」

「お、おう……そうだな……」

雪菜以外にあんなものを欲しがる客がいるとは思えなかったが、古城はいちおう同意しておく。二人を乗せたモノレールが、彩海学園の最寄り駅に到着したのは、それからすぐのことだった。見慣れたいつもの駅舎である。しかし古城たちが困惑の表情を浮かべたのは、駅構内が異様に混み合っていたせいだ。

「あ、古城君！　雪菜ちゃんも！」

階段を下りて改札口に向かっていた古城たちを、小柄な女子生徒が呼び止める。

「あれ、凪沙？　こんなところでなにやってんだ。部活の朝練があるんじゃなかったのか？」

「それどころじゃないんだよ！　来て来て！　今、あっちのモニタで昨日の事件のことやってるから！　ほら！」

「昨日の事件？」

古城と雪菜は怪訝な表情を浮かべたまま、凪沙に引っ張られて、駅に備えつけられているテレビモニタの前に移動した。周囲には異様な人だかりが出来ている。どうやらそれが混雑の原因だったらしい。

『――というわけで、立てこもり事件が発生した絃神市内のショッピングモールからの中継でした。それにしても驚きましたね。機械人形を悪用した犯行の凶悪さももちろんですが、事件解決に協力したのが特撮ヒーローに扮した人物というのが』

ワイドショーの女性キャスターが、真面目な口調で感想を述べている。映し出された中継先の風景は、古城たちもよく知っている大型商業施設の内部だった。

『そうですね。まさに正義の味方ということで、あ、映像、出ますか？　これは事件に巻きこまれた一般の方が撮影した動画なんですが――』

その画面が突然切り替わる。素人が撮影した事件現場の映像だ。純白の霧に覆われた景色の中、小柄な少女が、マネキ

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第4巻初回特典付録

ストライク・ザ・ブラッド・アペンド1
続・聖者の右腕／人形師の遺産
―第四章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）

協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗 / アスキー・メディアワークス /PROJECT STB

ン人形の群れを容赦なく薙ぎ倒している。
少女が身に着けているのは、露出の激しいチアガール風のコスチューム。銀色の槍を自在に操って、彼女は異形の殺人人形とも死闘を繰り広げていた。
「姫柊……あれって……おまえ、だよな？」
古城が、小声で雪菜の耳元に囁いた。
「な!?」と短くうめいたきり、雪菜はなにも答えない。目を見開いて絶句している。
『いやあ、見事な戦いですね。現実世界で人々を救った勇敢なヒロイン、しかも際どいコスチュームに身を包んだ謎の美少女ということで、こちらの動画は世界的な注目を集めてまして、インターネットの動画投稿サイトでは昨晩だけで百万回以上のアクセスがあったとか』
「な……な……!?」
雪菜の顔が羞恥で真っ赤に染まっていく。
攻魔師として訓練された雪菜の体術は、特撮番組中のヒーローの殺陣と比べても遜色ない。現実の光景とは思えないほどの凛々しさだ。しかし、そんな彼女の俊敏な動きを、カメラはしっかりととらえている。胸や尻や太腿だけが、やたら強調されているような気がするのは、古城の気のせいだけではないだろう。
「すげえ、よく撮れてるな。さすがマニア……」
「な、なんでいつまでも見てるんですか!?」
雪菜が涙目になって古城を睨みつける。しかし、キューティービッチの映像に目を奪われているのは古城だけではない。モニタを見上げている人々のせいで、駅の混雑は更に増している。視聴率が取れると踏んだのか、テレビ局は雪菜の戦闘シーンを延々と繰り返し流していた。
『こちらのキューティビッチの正体について、なにか情報をご存じの方は、ぜひ弊社までご連絡ください。有力な情報に対しては最大百万円の謝礼をお支払いいたします』
ワイドショーのキャスターが、淡々と情報を読み上げる。
百万円という金額に古城は思わず息を呑み、
「い、いやあああああ！」
古城に視線を向けられた雪菜が、うずくまって絶叫した。
こうして約一名の心に消えない傷を残しながらも、絃神島には再び平和が訪れた。
たとえそれが世界の吸血鬼〝第四真祖〟と、その監視役の少女に与えられた、束の間の平穏に過ぎないとしても――
消え残っていた朝霧はいつの間にか薄れて、眩い太陽が人工島の大地を照らしている。
今日もまた絃神島は暑くなりそうだった。

Episode "Legacy Of The Doll Maker"
―― The End.